様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２３０６

研究課題名（和文）考証趣味のネットワークと戯作との関わりを手掛かりとした近世後期文芸の研究

研究課題名（英文）Research on late modern literary arts based on the relationship between the network of examination and gesaku

研究代表者
有澤　知世（Arisawa, Tomoyo）

神戸大学・人文学研究科・助教

研究者番号：７０８１６３１３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、考証学と戯作との関わりを明らかにし、近世後期の文化・社会のなかに戯作を位置づけることである。
具体的には、秋田藩お抱え絵師の菅原洞斎が主催した古書画展観会に注目し、洞斎が会の成果を集積した『画師姓名冠字類鈔』や、参加者の随筆等を手掛かりに、19世紀の知識人の間で、古書画に関する知見が蓄積する様相を明らかにし、そのネットワークの中で戯作者山東京伝の知見を位置づけた。
また京伝は合巻作品で歌舞伎舞台や役者、遊里を描いた古画の縮図を掲載することで、彼の考証テーマのひとつであった元禄風俗を紙面に表現することを指摘し、「古画の模写」と「元禄風俗」を、京伝の戯作と考証を繋ぐ鍵語として位置付けた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
戯作と考証学の関係についてはこれまで、戯作者の執筆した考証随筆と戯作作品との関係について検討されることが多かったが、様々な社会的階層の人々が含まれる考証趣味のネットワークの様相を明らかにすることで、当時における共通の関心や、共有されている知識・情報を解明することができた。
従来美術史の文脈で検討されてきた、19世紀知識人らによる古書画展観会とその周辺資料に着目することで、俗文芸の集大成ともいえる戯作作品と、従来注目されてこなかった雅の領域における戯作者の活動との関連性を明らかにし、近世後期における文化・社会の中に戯作を位置づけ、近世後期における考証という営為の在り方を解明した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the relationship between Koshogaku and Gesaku, and to position gesaku in the culture and society of the late modern period.
Specifically, we paid attention to the old book painting exhibition organized by Tosai Sugawara, a painter of the Akita feudal clan. In, we clarified the aspect of accumulating knowledge about old calligraphy among intellectuals in the 19th century, and positioned the knowledge of the gesaku artist Santo Kyoden in the network.
In addition, Kyoden pointed out that by posting a microcosm of an old painting depicting the Kabuki stage, actors, and Yuri in a Gokan work, he would express the Genroku customs, which was one of his proof themes, on paper. "Reproduction of paintings" and "Genroku customs" were positioned as key words connecting Kyoden's Gesaku and Koshogaku .

研究分野：日本文学

キーワード：江戸戯作　考証学　山東京伝　19世紀　菅原洞斎　人的交流　絵画　画師姓名冠字類鈔

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

申請者はこれまで、戯作作品内部についての研究と、外的な要素に関する研究とを平行して行い、それらの相関性について考察を行うべきであるという問題意識のもと、Ⅰ.江戸戯作と他ジャンルの文芸との交流関係 Ⅱ.戯作の商業性 Ⅲ.戯作者の人的交流 という３つの視点を持って研究を進めてきた。

特にⅢの研究を進める中で、俗文芸の集大成である戯作と、当時の文人・知識人たちの動向とが深く関わっていることが明らかとなったが、戯作者周辺の人的交流の様相が未だ不透明であること、戯作者の活動の総体、特に考証学の内容の全体が把握されていないことが先行研究における問題点であり、本研究での解決を目指している。

２．研究の目的

本研究の目的は、考証趣味のネットワーク（考証に関わる人的ネットワークと、モノや知識の流通するネットワークとを合わせて称する）を解明し、戯作者が得ていた知識や資料を具体化した上で、それらが如何に戯作執筆に活かされているのかを明らかにすることによって、雅俗に亘る文化的背景の中に戯作を位置づけることである。

戯作と考証学の関係についてはこれまで、戯作者の執筆した考証随筆と戯作作品との関係について検討されることが多かったが、様々な社会的階層の人々が含まれる考証趣味のネットワークの様相を明らかにすることで、当時における共通の関心や、共有されている知識・情報を解明することができる。

俗文芸の集大成ともいえる戯作作品と、従来注目されてこなかった雅の領域における戯作者の活動との関連性を明らかにし、近世後期における文化・社会の中に戯作を位置づけ、近世後期における考証という営為の在り方を解明することを目指す。

３．研究の方法

本研究では、３つの小テーマを設け、それぞれ以下のとおりの手法で研究を行った。

Ａ.『画師姓名冠字類鈔』を手掛かりとした考証趣味のネットワークの研究

菅原洞斎の編著『画師姓名冠字類鈔』に注目する。本書は美術史の分野において、古書画についての基礎情報が記される資料として活用されているが、本研究では、その背後にある考証趣味のネットワークを明らかにする。

申請者は、その具体的な人名やそれぞれの伝記的事項の調査を進め、既に一定の成果を得ている。また展観会に参加していた鑑定家たちもそれぞれ『画師姓名冠字類鈔』と密接な関係にある古書画に関する事典類（観嵩月『画師冠字類考』、谷文晁『本朝画纂』）を編纂しているが、各書についての具体的な研究は不十分であるため、各書の比較調査を行い、人脈や資料の重なりや相違点等を明らかにする。

Ｂ.近世後期における共通の関心事項についての研究

近世期の考証随筆には、全体的に共通するテーマが存在する。たとえば、近世前期の画家である英一蝶や菱川師宣、同時代に文学の方面で活躍した井原西鶴、松尾芭蕉やその弟子達についての関心が高く、多くの随筆で、先行する随筆や友人の言説などを記した上で自分の

考えを述べるという形式をとっており、共同研究といえる側面がある。

本研究では、A で明らかにしたネットワークを手掛りとし、上記項目についての当時における研究成果を具体的に明らかにする。方法としては、細井貞雄『文車集』（国立国会図書館蔵）や小山田与清『小山田与清雑録』（早稲田大学図書館蔵）等、当時刊行された随筆類や、文庫を有する蔵書家の大田南畝や近藤正斎等の日記や書簡を網羅的に調査し、資料や考証随筆、または個人の言説がどのように蓄積され、更新されたのかについて明らかにする。

C.山東京伝を中心とした考証と戯作との関わりについての研究

A、B の成果を統合し、山東京伝の戯作作品を中心に、考証活動との関わりについて考察する。作品の背後にある京伝の知識や教養は、上述のような考証趣味のネットワークに身を置くことで得た知識や情報に基づくと考えられるため、京伝の交遊域で行き交っていた情報や資料が、如何に戯作に反映させられているかについて考察する。

京伝作品の特徴として、挿絵に考証の対象となる古い資料を利用することが挙げられる。京伝がどのような資料を目にしたかを明らかにすることにより（A)、戯作作品における挿絵の典拠の一部とその活用方法が明らかになる。また、西鶴や其角といった、近世前期の文学者を京伝がどのように捉えていたのかを明らかにすることで（B)、戯作作品の序文や作中に西鶴や其角の面影を映すことにどのような意味があるのかについて考察する。

その上で、京伝をはじめとする江戸戯作者たちが、近世後期における新興文学である江戸戯作をどのように捉えていたのかについて明らかにし、戯作者の営為を、雅俗に亘る近世後期の文化・社会のなかに位置づける。

４．研究成果

本研究では、19 世紀初頭の江戸において、松平定信を中心とする知識人たちが、古書画についての知見と資料を蓄積していたこと、その考証趣味のネットワークの中に、戯作者である山東京伝の知見が位置づけられることを指摘し、身分を超えた知的交流の様相を、具体的な資料を以て明らかにすると同時に、京伝作品においてどのように考証の成果が顕れているのかについて具体的に明らかにし、19 世紀の江戸戯作者の関心の在り処や、作者としての姿勢について論じた。各小テーマに即した成果は、次のとおりである。

A の成果については、以下のとおりである。

文化年間における文化人の古書画に対する関心の在り方と、情報のネットワークの様相を探るため、秋田藩江戸邸に仕えた狩野派の絵師菅原洞斎が、文化三年頃から月に一度開催した古書画展観会の場を再現することを目指し、その成果を論文「菅原洞斎の古書画展観会」として『上方文藝研究』第 16 号に掲載した。

洞斎が絵師の伝記や落款・印章をまとめた『画師姓名冠字類鈔』（国立国会図書館蔵）および、本書と密接な関わりを持つとされる谷文晁『本朝画纂』は、展観会の成果を収めた書物とされる。本稿では、展観会参加者による書留や発言録などを併せて参照し、会の席上でどのような資料が公開され、どのような議論が交わされたのかを明らかにした。

具体的には、谷文晁『文晁画談』、屋代弘賢『己卯掌録』、『輪翁画譚』を併用し、幕府祐筆を務めた弘賢が、特権的な立場を利用して、徳川家縁の寺の従物などを会へ提供していることや、和漢の資料を参照しながら、当時の古書画収集に不可欠であった縮図の方法について議論していることなどを具体的に指摘した。

Bの成果については、以下のとおりである。

『画師姓名冠字類鈔』に収められた情報の重要なソースと思われる、菅原洞斎主催の古書画展観会で閲覧された書画や交わされた議論について具体的に明らかにし、文化年間において、古書画についての考証を牽引していたサロンにおける関心事や、彼らが参照した書物について明らかにすることができた。

洞斎の展観会への参加者の殆どは、松平定信主導の『集古十集』編纂に関わった人物であったことを指摘したうえで、彼らの関心の在り処や共有された知見は、定信による古器古物収集事業の大きな流れの中に位置づける論文「菅原洞斎の古書画展観会」を、『上方文藝研究』第16号に掲載した。

Cの成果については、以下のとおりである。

京伝の合巻において歌舞伎舞台や役者を描いた古画の縮図を掲載することで、彼の考証テーマのひとつであった元禄歌舞伎を紙面に表現していることを指摘した。また、古画の模写において、歌舞伎と長い関わりをもつ鳥居派五代目である鳥居清峯に期待を掛け、挿絵画師として採用した可能性を述べた。この成果は、「京伝合巻における古画―『籠釣瓶丹前八橋』・『糸桜本朝文粋』を例に―」として『上方文藝研究』に掲載した。

また、元禄前後の遊里資料に見られる野晒模様を着た人物の表象を、文化史・文学史的に読み解き直し、野晒模様が京伝が憧憬した近世初期の遊郭文化の中に見出される文様であったことを示し、戯作中でその意匠を扱う意義について論じた（「生まれ変わる意匠—京伝作品における野晒模様の衣装—」『国文論叢』所収）。

さらに、古浄瑠璃「一心二がびやく道」の初演時期について、柳亭種彦が考証の上最古とした事例に先行する正本が、大阪大学付属図書館赤木文庫に存することを確認したうえで、京伝や種彦といった、19世紀初頭に活躍した戯作者たちが、古浄瑠璃に強い関心を抱いていたことを述べ、京伝が自作の読本のなかで、「一心二がびやく道」を祖とする清玄桜姫の物語を如何に扱ったかについて論じた（「山東京伝『桜姫全伝曙草紙』小考―清閑寺の場面を中心に―」『上方文藝研究』所収）。これらの研究から、京伝の戯作と考証を繋ぐ鍵語が「古画の模写」と「元禄風俗」であることを導きだした。

また、考証随筆『骨董集』執筆への傾倒が指摘される文化十年頃に成立した合巻作品の典拠分析とその利用法の考察により、京伝が『通俗画図勢勇談』の挿絵と本文をしばしば利用したこと、また、典拠には欠けている本文を補うために違う書物を併用し、絵と本文の関係をよく理解したうえで利用していたことを指摘した。この成果は、「文化十年の京伝合巻―『通俗画図勢勇談』利用に注目して―」として『読本研究新集』に掲載した。また、近世中期～明治初期にかけての絵入り刊行物において参照されている先行作品とその利用法については、「絵を読み解く —近世・明治の出版物を読む」（『読まなければなにもはじまらない』所収）でも論じた。

また、後期の江戸戯作者の作者意識を探るために、京伝と三馬の草双紙において作者がどのように登場するのかを分析し、彼らが意識的に虚構の作者像と現実の作者像の距離感を縮め、キャラクターとして意識的に振舞っていることを指摘し、後期作者の生活において戯作執筆がどのような位置を占めたのかを考察した。この成果は、「戯作者の象徴―京伝・三馬に注目して―」として『日本文学研究ジャーナル』に掲載した。

さらに、考証学と戯作の関係について、寛政の改革前後の京伝黄表紙に見られる自己言及

に着目して「山東京伝『金々先生造化夢』に見る道徳」と題し、壇国大 学日本研究所主催国際シンポジウムにおいて口頭発表を行った。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 有澤知世	４．巻 16
２．論文標題 菅原洞斎の古書画展観会	５．発行年 2019年
３．雑誌名 上方文藝研究	６．最初と最後の頁 77～88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有澤知世	４．巻 15
２．論文標題 京伝合巻における古画―『籠釣瓶丹前八橋』・『糸桜本朝文粋』を例に―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 上方文藝研究	６．最初と最後の頁 55～64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有澤知世	４．巻 15
２．論文標題 文化十年の京伝合巻―『通俗画図勢勇談』利用に注目して―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 読本研究新集	６．最初と最後の頁 17~31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 有澤知世	４．巻 7
２．論文標題 戯作者の象徴―京伝・三馬に注目して―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 日本文学研究ジャーナル	６．最初と最後の頁 65~77
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有澤知世	4．巻 18・19
2．論文標題 山東京伝『桜姫全伝曙草紙』小考―清閑寺の場面を中心に―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 上方文藝研究	6．最初と最後の頁 50~57
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 有澤知世	4．巻 59
2．論文標題 生まれ変わる意匠―京伝作品における野晒模様の衣装―	5．発行年 2022年
3．雑誌名 国文論叢	6．最初と最後の頁 23~36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　2件／うち国際学会　2件）

1．発表者名 有澤知世
2．発表標題 合巻における名所図会利用―古典知識の受容に注目して―
3．学会等名 タイ国日本研究国際シンポジウム2018（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 有澤知世
2．発表標題 山東京伝と元禄歌舞伎―合巻の造本に注目して―
3．学会等名 江戸東京研究センター主催シンポジウム「追憶のなかの江戸」（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 有澤知世
２．発表標題 山東京伝『金々先生造化夢』に見る道徳
３．学会等名 壇国大学日本研究所主催国際シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2021年

〔図書〕　計3件

１．著者名 鈴木健一	４．発行年 2018年
２．出版社 勉誠出版	５．総ページ数 384
３．書名 輪切りの江戸文化史	

１．著者名 法政大学江戸東京研究センター、小林 ふみ子、中丸 宣明	４．発行年 2020年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 272
３．書名 好古趣味の歴史	

１．著者名 木越 治、丸井 貴史	４．発行年 2021年
２．出版社 文学通信	５．総ページ数 320
３．書名 読まなければなにもはじまらない	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関